

---

この文章は、昭和 31 年 8 月 3 日から 7 日まで、長野県軽井沢地蔵ヶ原で 13, 000 名のスカウトを集めて開催された第 1 回日本ジャンボリーを見学した文豪 吉川英治氏のものです。

---

「奥の南軽井沢高原に、先頃から日本ジャンボリーの大キャンプ群が展開されていた。迎えにきた香屋子の印象にもと、もう日暮れだったが、車をとばして行ってみた。山波に囲まれた高原の段丘に、世界 14 ケ国のボーイスカウトの色とりどりな国旗が、ことに吹き流しの幟なども、夕空の大浅間を正面に、色彩映画の中世騎士陣でも見るようにきれいだった。

夏中の地方新聞をみていると、「北アでも愚連隊」とか「太陽族、山小屋を襲う」とか、とにかく暴力という活字と二つの流行語は、毎日の紙面に見えない日はない。だが、どうして、ジャーナリズムとは、小数なものをそう大多数の如く錯覚させるのだろう。希少価値というものなのか。戸塚文子氏が何かの紙上で「ついに太陽の子ということばも、私たちには、汚れを感じさせてしまった。」と嘆いていたが、同感である。

だが、ほんとうの太陽の子は、やはり健康な若さを、ジャンボリーの無数の天幕に、野の花のように咲かせていた。1 少年に道をたづねる。じつに親切で、かつ明晰で、愛らしい。天幕の中で彼らはねぐらの支度やら、晩さんの用意に楽しげだった。米、中国、フィリピン、ドイツ、ポルトガル、ベルギー、スイスの遠くから来ている少年たちのうちに、どここの国か、ただ 1 人で 1 国を代表して来た少年もあるという。新聞記者が、その独りぼちな少年にむかって「淋しくない？ お友達はできた？」と尋ねたら、その少年は、高原の無数の天幕を指して、「ちっとも淋しくない。友達は、こんなにいるから」と答えたそうだ。これは地方紙記者のインタビューとして翌朝の紙面に見えた小記事である。その朝、何となく朝飯までおいしかった。」（吉川 英治 記）

